

町史のひとこま

(第一回)

●●星野兄弟の首塚●●

須恵町から天神ゆきのバスにのると、とちゅう吉塚をとおり。新幹線のガードの少し手前、吉塚市場の入り口にあたるところに、地藏堂がおかれているのがバスからもよく見える。これが吉塚地藏だ。

吉塚地藏の横手には、バス道路に面して、福岡市による説明板がある。この地藏堂には多くの人が目をとめているだろうけれど、説明板まで読んだことのある人は、ほとんどないのではなかろうか。

説明板は吉塚の地名のゆらいをしるしたもので、それによると、吉塚という地名は、須恵の高島居城にもって討ち死にした星野吉実・吉兼兄弟の首が、その地にうめられたことからこっている。はじめ吉実塚（よしざねづか）と呼ばれていたのが、のちに吉塚となったものである。

星野兄弟は、今の八女郡星野

村に城をかまえた豪族で、天正十四年（一五八六）島津氏が筑前を攻めたとき付き従い、四王寺の岩屋城攻撃にも加わっていた。七月二十七日、岩屋城が落ちると、島津軍約五万は立花統虎の立花城に向かい、城下に広がる香椎宮に乱入して火をかけ、本殿も楼門もことごとく焼きつくした。このとき先頭に立ったのが星野兄弟であった。

守る立花統虎は弱冠二十歳。名将として知られた高橋紹運の子だ。紹運は七百六十余の部下とともに岩屋城を死守、全員壮烈な最期をとげている。

統虎もさすがであった。島津の大軍を前に屈する気配を見せない。二十日以上もろう城のまま、ひたすら秀吉の援軍を待つ。両軍はジリジリと日を送った。八月十六日、秀吉から大友氏に上陸、急報を得た島津軍は秀吉の勢威をおそれて、立花城の

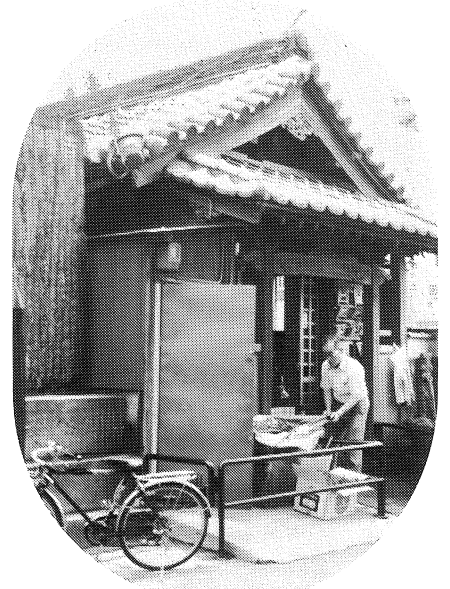
吉の勢威をおそれて、立花城の

かこみをとぎ、ただちに退却を開始した。島津は博多の町を焼きはらい、立花勢のおさえとして高島居城に星野兄弟を残した。

星野兄弟の決意は悲壮なものがあつただろう。島津勢の退路を守るために前線に取り残された形だ。秀吉みずから九州に向かおうとしていて、敵軍は勢いを増すばかり。

八月二十五日、立花統虎の軍が竹城山麓に姿をあらわした。統虎は父のとむらい合戦に勇み立っていた。星野兄弟は手兵三百とともに勇敢に戦ったが、ついに全員が討ち死にした。これは、秀吉の九州平定を象徴し、九州の戦国時代の終わりを告げ

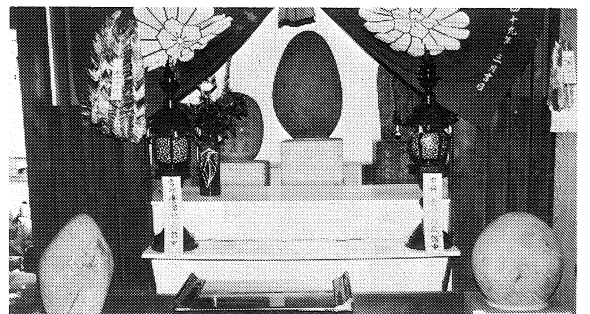
九州の戦国時代の終わりを告げ



▲ 地藏祭りの朝

る戦いであつた。吉塚地藏堂は、星野兄弟の首塚に、元祿のころ妙藏尼が地藏菩薩をおいて落武者の霊をなぐさめたものと言われ、今も地区の人たちがいねいに祭っている。福岡市内はもとより、遠く唐津からもおとずれる人が絶えない。毎月二十四日が祭礼で、ことに五月・七月・十月は大祭とされている。

(町誌編集委員会事務局・石瀧)



▲ 地藏堂の中 (霊位石)

